



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

聖母マリアの妊娠

新約聖書は中絶についてどんなメッセージを伝えているのでしようか。それについては何も書かれてないという人もいます。しかし私は、この問題にして、大変説得力のある導きが新約聖書にはあると信じています。そのメッセージは毎年語られているマリアの妊娠の物語です。

イースターに祝うキリストの復活という事柄の

次、彼の誕生が私たちが祝う大切な出来事です。しかしある意味では、俗世間も

私たちと共にクリスマスの休日を祝うので、多くの人にとってはこれが最も大切なことのように思われています。

「彼」を信じる私たちは、この点に力の源を求めます。聖書が教えている通り、キリストと彼の復活がな

かったならば、私たちの信仰は無駄に終わってしまっただけです。

私は作家であり、講演家でもありますが、もともとは物理学者で科学者なのです。それが一番びつたりときますし、医学的、科学的、そして社会的事実を教えることが私が最大に社会に貢献できることと思っています。

クリスマスはキリストの誕生を祝うときです。「彼」いや「神」は私たちの所に来て下さいました。神人、私たちの中を歩んでいた我々の兄弟。信じ難い真実です。

もちろん、誰もがこれに信じるわけではありませんが、信じる人にとっては「彼」の受胎、マリアの妊娠、キリストの誕生は多くのことを教えてくれます。

す。マリアの妊娠について実際は医学的歴史は興味深いものです。私たちは旧約聖書によく引用しますが、マリアの妊娠について語ることはほとんどありません。これは残念なことです。というのも、キリストの中絶に関してのメッセージはここにあるからです。

話はとてもはつきりしたものです。聖霊はマリアに影を投げかけ、彼女はあつるものを宿しました。なにを宿したのでしょうか。胎児になり、そしてその延長上のどこかで、恐らく誕生の時にあります。イエス・キリストになる、受精した卵子を宿したのでしようか。いいえ、啓示をうけた福音の筆者たちは大変明確に言っています。彼女は神人イエスという人間を宿したのです。たとえ、どんなに小さくても「彼」は受胎の時に完全に存在していたのです。これ

がイエスで、私たちの体に乗り移り、罪以外の面でも、私たちが人間の中の一人になりました。もしこれが真実ならば、わたしはそう信じますが、マリアの子宮内にいたキリストにとって正しいことは、私たちにしても正しいはずで

もし彼が、受精の時、神人として完全に存在していたならば、私たち一人一人もそうなのです。自然科学は、受精の時に、私たちは完全に存在し、性別もはつきりし、完成され、人間であり、無垢であることを見せています。福音書もまた、私たちの魂はその時点でつくられているということを言っていると私は信じています。もし、「彼」が私たち人間の一人だとして、「彼」の魂が受精の時につくられるならば、私たちも皆同様なのです。これだけで十分です。これだけで十分です。これ以上言うことはない

と思います。

しかしながら、このような考えを強めるようなマリヤの妊娠についての話があるならば、それは大いに助けになるでしょう。幸運なことにもつとあるのです。彼女の親戚の女性、エリザベスを訪ねたときの話があります。ルカ伝では、御使いの訪れの後、「その後すぐに、マリヤは起き上がり、ユダという山里の町に急いだ」となっています。一般的には、ユダとは、エレサレムのそばにあるアインカリムという町だと考えられています。ジエイムズ王の聖書には「その数日のうちに彼女は去った。」と書かれています。新アメリカ・スタンダード聖書は「その後」としてあります。ギリシャのは「急いで」となっています。これらは熟語や決まり文句ですが、どの学者も「すぐに」「直ちに」

「ゆっくりでなく」という意味だと解しています。彼女はぐずぐずしていませんでした。マリヤがエリザベスを訪れるために本当にすぐ出発したということははっきりしているようです。長くとも、2〜3日以上は待ちませんでした。どうやって彼女は旅をしたのでしょうか。歩いたか、口バに乗ったかも知れません。距離は約100キロ以上でした。おそらく10日以上はかからない旅だったでしょう。彼女は出発前に妊娠の知らせをヨセフに伝えただでしょうか。ほとんどの学者は、そうでないと考えています。マリヤが三ヶ月後にナザレに戻った後、夢の中で初めてそれを知った可能性が強いのです。マリヤは自分が本当に妊娠したことを信じたのでしょうか。はい、彼女は「私は主のはしためです。お言葉の通りこの身になりますように。」と言ったのです。

確かに、彼女はザカリヤのように疑い深くはなかったのです。エリザベスの夫がこのことを疑ったとき、彼は御使いに叱責され、おしになつてしまいました。そう、彼女は確かに信じていたのです。御使いはマリヤをザカリヤに対してとは全く違う扱いをしました。御使いは彼に対して大変高圧的でありましたが、「非常に好ましい」彼女に対してはそうではありませんでした。信仰と慈悲が切り離せないものとして、彼女は大変な慈悲を持ち合わせていたので、非常に信仰深かったと考えなければなりません。

しかしながら、エリザベスが親戚だということの他に、なぜマリヤは彼女を訪れたのでしょうか。彼女は御使いからエリザベスの高齢出産について告げられていました。彼女を訪れたいと思うのは実に自然なことだったのです。共に

に幸運を喜ぶためです。しかし、マリヤの聖霊に対する、心からの返事を疑うというところでなく、別の、可能性のある理由を考えてみましょう。エリザベスの家に着いたときはマリヤは妊娠してからまだ10日しかたっていないかもしれません。これはまだ、妊娠の確証となるものが体にも出てくるには早すぎます。確かに彼女は信じていたのですが、彼女もやはり人間です。彼女がイエスの母となることを告げた同じお使いはエリザベスの妊娠のことも伝えました。もし彼女が、エリザベスが本当に妊娠していることを確かめられたのなら、紛れもなく神からの本當の御使いとして天使を信じることができそうですし、同様に、紛れもなく彼女自身に母親になるといって御使いのお告げも信じていることができるでしょう。それだからこそ、妊娠して10日経つ

か経たないうちに、エリザベスの家にやってきたのです。原始的な伝達手段しかなかった時代に、マリヤとエリザベスの間にいかなるコミュニケーションもあり得たはずがないことを覚えておいて下さい。マリヤの訪問は驚きでした。もちろんエリザベスは彼女の妊娠を知りませんでした。エリザベスはマリヤを見て、神からの靈感を通して、彼女を「主の御母」、または違った訳では「救世主の御母」と呼んだのです。マリヤがただ母となつていただけでなく、イエス、救世主を宿していることを悟つたのです。イエスはそのときはまだピン先程の大きさにもなっていないかったかも知れなく、ただ、マリヤの子宮の中に置かれただけだったのです。それでもエリザベスは、「彼」を「主、神、救世主」と呼んだのです。

これは、マリアが宿して
いたのは、胎児でも、イエ
スになっていくものでも
なかったという立派な証
です。エリザベスはそんな
にも早い時期に(マリアは
まだ第一期を過ぎてもい
ませんでしたが)、マリアは
すでに神人イエスという
人間を宿しているという
ことを、靈感を受け悟った
のです。エリザベスは「あ
なたは女の中で祝福され
た方、あなたの胎の実も祝
福されています」といいま
した。

しかしその時点で、イエ
スがマリアの子宮の中に
完全に存在していたとい
うことを示す別の出来事
がありました。エリザベス
がマリアの挨拶を聞いた
とき、六ヶ月になったばか
りのエリザベスの中で安
らいでいたもう一人の生
まれていない子供、バプ
テイストのヨハネが、従兄
弟のイエスのことを知っ
て、喜びのあまりお腹の中

で飛び跳ねたのです。ヨハ
ネは六ヶ月の胎児でいな
がら、10日しかたっていな
い胎児の存在を認めたと
でしょうか。そうです。し
かし、なんとという胎児だっ
たのでしょうか！

こうやって、クリスマス
(マリアの出産時期にな
り、私たちを救うため、私
たちの罪のために死に、復
活した「彼」をこの世に生
み落としたこの時に、この
素晴らしい物語に思いを
巡らします。不思議なの
は、信心深いキリスト教で
ある人の中には、新約聖書
は中絶の問題について何
も言っていないという人
がいるということ。この
問題は、聖書全体を通し
て考え答えなければなり
ません。そして、初めて私
たちは確信をもって話す
ことができるのです。

私たちが皆、イザヤ、エ
レミヤ、詩編139やその
他の旧約聖書の節、私たち
がまだ子宮にいる間に、神
は私たちを「存じ」で、私た
ちを形造られ、愛しておら
れるということ。これらと
いるものですが、これらと
は馴染みが深いです。新約
聖書、福音書、ルカ伝、マ
リアの受胎、彼女の妊娠、
エリザベスを訪ねての旅、
マリアを「主の御母」と
知ったこと、イエスの存在
という記念すべき事実を
確かめる結果となったヨ
ハネの反応が見られた妊
娠のきわめて初期のこと
などには、あまりよく注意
を払わないのが私には不
思議に思えます。

マリアは中絶を受けた
と思うであろう、筋の
通った人間的な理由は
持っていました。ヨセフは
彼女を拒否しませんでし
たが、彼はそうする権利を
持つていましたし、またそ
うする義務さえありまし
た。御使いのお告げがな
かったならばそうしてい
たでしょう。彼女は未婚の
母になり、ヨセフに、友人
に、家族に追放されるかも
知れなかったのです。彼女
は気高い宗教的体験をし
ましたが、それは段々すり
減ってはいかなかったで
しょうか。そうしたなら
ば、どうしたでしょうか。
育児のための生活援助は
当時はなかったのです。マ
リアは食糧、衣類、住居を
得る術がなかったでしょ
う。彼女と子供は見捨てら
れたでしょう。飢えに苦し
んだかも知れません。実
に彼女は、この世に通じる中
絶を受ける理由を十分
持つていたのです。今日の
カウンセラーだったなら
ば、彼女の義務として、中
絶を勧めたことでしょう。



しかし、彼女は中絶はし
なかったし、しようとしな
かったし、また断固するべ
きではなかったのです。そ
れは、彼女の中にいるイエ
スという人間(例えばそれが
10日というまだほんの初
期の段階だったとして
も)、生きている人間を殺
そうとしていたことにな
るからです。

確かに生きていて、性別
もあり、完成され、創造主
によって名を知られてい
る人間の生命は、母の子宮
の中でしっかり存在して
いるということ。エリザ
ベスとヨハネを通して神
は私たちに語られていま
す。10日目の胎児としてキ
リストのエリザベス訪問
は、示すことのできるどの
ような科学的事実や状況
よりもずっと素晴らしい
神聖な生命の証明であり、
論証として揺るぎないも
のです。

中絶を許す、私たちの仲

間の兄弟であるキリスト教徒の皆さんに聞いてみましょう。マリアがはい、お言葉通りこの身になりますように。」と御使いに答えたときに、彼女はなにを宿したのでしょうか。イエスになるであろう胎児でしょうか。それとも完全な人間であるイエス自身でしょうか。

J・C・ウイルケ
(医学博士)

エリザベスと彼女の胎児のヨハネは、これ以上の証が必要であるとして、それに対する答えを出してくれました。確かに中絶は完成され、生きている人間を殺すことなのです。マリアの妊娠という偉大な歴史的事実がそれを教えてくれています。

中絶賛成のキリスト教徒のあなた、どうぞこの事実に対して祈って下さい。私は、中絶賛成であり、自分がキリスト教徒だと言うのは全くの矛盾だと信じています。マリアの子宮の中にいた初期に起こっ

た決定的な事実によって、

イエスは中絶は間違いだ
ということをはっきり私
たちに教えてくれていま
す。

養子縁組

【愛のある選択】

A 「わたし、赤ちゃんが
できました。」

はじめて妊娠したとわかった時、おそらく、「なぜそうなの？わたしの将来はどうなるの？どうすればいいの？」と思ったことでしょう。「このように予期せぬ妊娠の際、重大な決定を下さなければなりません。時間をかけて種々の選択肢について考え、自分と自分の中で成長しつつある小さな生命にとって何が一番いいのかを決定することは、あなた自身の責任です。この記事は、あなたが様々な可能性を考慮する上で役立てば、と書かれたものです。これを読むことで、決心に一步近づくことでしょう。あなたの

人生において最も重要な決定の一つなのですから、じっくり読んで下さい。

あなたの妊娠を知った人達は、いろいろとアドバイスしてくれると思えます。自分の体をコントロールする権利はあるのだから、おろすのが一番いい、という人もいます。

それは一見簡単な解決のようですが、実際はそうではありません。ほとんどの妊娠は6週間目まで発見されませんが、それまでに赤ちゃんの心臓は3週間も動いており、脳波もでてきます。2週間前から神経も出来上がっており、お母さんが感じるのとは後3カ月半後ですが、もうじき赤ちゃんが動き出すのもこの頃なのです。墮ろしてしまふことが、あなた自身の体をコントロールするのみでないことがわかります。赤ちゃんを含めた二人の問題なのです。墮ろすことは、赤ちゃんのため

にならないばかりか、あなたが一生涯悩まされる深刻な問題をもたらしかねません。赤ちゃんから生きる機会を奪ってしまったとわかり、精神的に参ってしまったたりします。又、普通思われていたより、肉体的障害が起きる可能性は大きいのです。生殖器官を痛め、正常な妊娠が再び出来なくなる恐れもあります。他人の説得を無理に受け入れて、将来後悔するような決定をしないで下さい。

B 「解決法は？」

あなたと赤ちゃんの二人の命、そして未来を尊重した、どのような解決法があるのでしょうか。次のような選択ができます。

- ・ 赤ちゃんを自分と家族のもとで育てる。
- ・ ある期間だけ他人に養育を依頼する。
- ・ 養子縁組をする。

C「あなたに親となる

用意がありますか？」

今一番考えなければならぬのは、どうすれば赤ちゃんの体と精神の成長にとって一番良い環境をつくってあげられるか、ということ。自分に次の質問をしてみてください。

2人にとって最良の選択として選ぶことを真剣に考えてください。せつかく出産にふみきつて、9ヶ月育てた後に子供を手放すことなど、考えられないかもしれません。でも、養子縁組をもつと良く理解し、どうか可能性の心を開いてください。次に取り上げる質問が、その理解に役立つと思います。

D「養子縁組とは？」

これから少なくとも18年間、子供を愛し、親としての責任を果たせませうか。自分よりも子供の幸せを考えてあげられますか。

養子縁組とは、子供を養父母となる夫婦に引き渡し、その家族の一員として育ててもらったための法的手続きです。

E「養子縁組は、永久的なものでしょうか？」

結局家族に親役をバトンタッチ、ということにならない自信がありますか。

はい。法律上、子供は永久に引き取った家族の一員とみなされます。

F「養子縁組はどのように行われるのですか？」

世界的レベルで考えて、養子縁組には、2つの段階があります。まず、生みの母親が、子供を養子として手放してもよいという承諾の手続きをします。地域によっては、父親の承諾が必要な場合もあります。2番目に、引き取りたいという夫婦が申し込み手続きをし、政府公認の斡旋機関によって養父母と認められねばなりません。子供に対しての保護や愛情を十分に与えてやれる夫婦かどうか確認するために、徹底した家庭調査が行われます。

G「養子縁組を考えるのは自分勝手でしょうか？」

いいえそんなことはありません。よい母親になれるか真剣に考え、家族や友達の助けを借りても養育

が困難だとわかっていらつしやることは、あなたの賢明さを示しているにすぎません。あなたと赤ちゃんにとって一番よいと思うことを選択することは、決して自分勝手なことではありません。それに、あなたはすでに、「命」という最高の贈物を与えているのです。

H「赤ちゃんは本当の両親のものではないのですか？」

生みの親に子供を育てる用意がないということもあるのです。養父母の方が、子供に必要な持続性のある安定した環境を与えられるかも知れないのです。

I「彼と結婚して、自分達で育てた方が良くないのですか？」

赤ちゃんに安定した家

族を、と願っていらつしやることから、あなたの愛情と成熟した見方がうかがえます。愛情のある家庭環境が、赤ちゃんを育てる上でどれだけ重要か、を認識なさっています。しかし、今日一般にも言われているように、妊娠したから結婚するというのは、愛のある家庭を築くしつかりした土台とは言えません。そのような圧力の下での結婚は、失敗に終わる可能性が高いのです

J「両親や友達に子供を手元におくよう説得されたらどうすればいいのですか？」

あなたが養子縁組を考えていることを、ご両親や他人になかなか理解してもらえないかもしれませぬ。ご両親は「孫ができる」、彼は「父親としての義務がある」、友達は「愛らしい赤ちゃんが生まれ

てくる」とそれぞれ考えているかもしれない。しかし養子に出すか自分で育てるかという決心は、最終的にはあなたが一生振り返って考え続けるものです。あらゆる可能性をよく考えた上で、自分で決めるべきです。

K「養子縁組をする、しないは、いつ決めなければなりませんか？」

妊娠中、出産後のどの時点でも決められます。出産のかなり前から決めるお母さんもいれば、出産後しばらく他人に面倒を見てもらってから決める人もいます。しかし、出産前に決めた方が、生みの母親にとって心理的に楽だと、いう人が多いようです。

L「養子縁組をしたら、まわりの人はどう思うのでしょうか？」

あなたを大事に思っている人なら、わかってくれるでしょう。自分と子供にとって正しい、愛のある選択をしたということに、あなた自身気付くでしょう。それが最も重要なことです。

M「生みの両親は養子に出したあとどういう気持ちになりますか？」

養子に出した後悲しい気持ちになるのは、普通のことです。しかし、そのような母親の多くは、子供にとって最も良い人生のスタートを切らせてやれたと思うと、心が安らぎ、力が湧いてくる、と語っています。

N「わたしの赤ちゃんは、ちゃんと面倒をみてもらえるのですか？」

世界的レベルで考えて、養子縁組の斡旋機関には、

がいないですからね。

P「養子縁組は一番簡単な解決方法でしょうか？」

いいえ。「これはわたしの子です。どうにかして育てます。」と宣言してしまおう方が、ずっとやさしいかもしれません。養子縁組を考えると、自分とまわりの人について考えさせられます。養子縁組は、やさしい解決法ではなく、子供に対する無私の愛情から生まれる大人の行動です。養子縁組は成功します。どうか考えてみて下さい。

O「養父母について何か知らされるのですか？」

その場合の規則によっ

て、与えられる情報量に差があります。もちろん、子供が愛情と保護を十分に与えられている、と教えてもらえますが、これが最も大切なことですね。そうでなければ養子縁組の意味

変化する姿勢

私達の社会は、完璧な人間のための社会なのである。今日、母親達は今までのどの世代よりも、社会的圧力によって自分達の子供を拒絶し中絶する傾向にある。私達は完全でない子供を歓迎しないことによって、その子供の母親をも見捨てている。もし私達は支持を提供することに失敗すれば、私達も彼女達の罪を共有することになるのである。

今こそ社会がその中絶に対する姿勢を査定する時期であり、これは誠実と犠牲の両方を要求する過程である。この領域で統制力を発揮してくれる素晴らしい地位にあるのが聖職である。危機にある個人に対する聖職者の真実と合わさった同情心は、多くの生命を救ってきた。

私達は、中絶という枠に自分がどのように当てるかをまわすかを決めて見なければならぬ。この問題に関する牧師の言葉を聞くこと、そして、重大な社会問題の解決法を探す私達の努力への彼らの支持が必要である。キリスト教徒は、袖をまくりあげて頼りにされている時にそこにおいて、保護、支持、時間、そして祈りを迷い、孤独な者に与えなければならぬ。

私達には頼りになる技量と技術の大きな蓄えがあるが、一番の拠所は、聖礼典である。聖礼典によって回復した者は、例えば物事が再び暗く、混乱しているように見えても、キリストに希望の根源を探し求めることができたことを知っている。人間の疎隔の空虚さを他のもので埋めようとしても、結局は一つのものでしか埋めることができない。中絶の魅惑的

な力は、完全でない私達をも決して拒否することのない、その大きな愛の力に對抗することはできない。この結合感を感じ始めている人を見るのは素晴らしいことである。更に素晴らしいのは、その結合を可能にした橋の建設を手伝う道具になれたことである。

日本プロ・ライフ・

ムーブメント

(中絶に反対する運動

代表者

ノボトニー・ジェリー

OMI



《事務所だより》

今年もいよいよ押し詰まって来ましたが、皆様いかがお過ごしですか。春に事務所を開設したと思ったら、もう冬です。この間、事務所の活動も少しずつ増えてきました。9月「カトリック正義と平和全国会議」、10月「ベリンクス医学博士夫妻とオーデプラト医学博士によるワークショップ」、11月「キリスト者の家族計画を考えるワークショップ」等に参加。その他、プロ・ライフ支援のためのチャリティーコンサートも開かれました。地元新聞社を訪ね、中絶問題(特に十代の)についての話しも伺いました。また、ビデオやパンフレットの注文をいただいたり、励ましのお便りやお電話をいただいたり、少しずつ少しずつ運動の輪が広がっていつている

のを感じます。プロ・ライフを支援してくださる方々や、同じ思いで運動している他のグループの方々と共に、これからも頑張りたいと思います。この一年間、本当にありがとうございました。たくさんのご意見を感謝しつつ出会いは感謝しつつ……。では、よいクリスマスと、そしてよいお年をお迎え下さい。

1989年12月

プロ・ライフ・

ムーブメント

スタッフ一同